

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

英語スピーチコンテストの課題：
より教育的な活動とするために

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 和宏, Nomura, Kazuhiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/494

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



英語スピーチコンテストの課題

より教育的な活動とするために

野村和宏

キーワード：スピーチコンテスト，パブリック・スピーキング，審査，フィードバック，自律した学習者

1. はじめに

言語を音声として発しコミュニケーションの手段として用いるという言語活動は、「独白」を除き聴衆が存在する場合は大きく「会話(conversation)」と「スピーチ(speech)」に分けられる。辞書によると conversation は “an informal talk in which people exchange news, feelings, and thoughts” であり，一方 conversation に対比される概念としての speech は “a talk, especially a formal one about a particular subject, given to a group of people” と定義されている¹。会話もスピーチもどちらも「話すこと」であるが，ここに示されているようにある程度まとまった人数の集団に対して一定のメッセージをしっかりとした形で伝える言語活動がスピーチであり，時間制限をもつことが多い。グループ集団に対して話す，つまり人前で話すということは speaking in public で，これがいわゆるパブリック・スピーキングということになる。Lucas (2007: 9) はパブリック・スピーキングと会話の類似点を述べた後，両者の違いを (1) “Public speaking is more

¹ Longman Dictionary of Contemporary English, 4th ed.

highly structured. (2) Public speaking requires more formal language. (3) Public speaking requires a different method of delivery.” という3つの項目にまとめている。

学校の教室で行われるスピーチ発表もクラスの他の生徒の前で発表するという点でパブリック・スピーキング活動である。教室の枠を超えてさらに多くの聴衆にメッセージを有効に伝えるためにどれほどスピーチの質を高めることができたかを他の発表者と競う競技会がいわゆるスピーチコンテストで、学校が単独で自校の生徒を対象として内部で行うものから組織的に構成され複数の学校が参加し市や都道府県レベルで開催するもの、さらには地区予選の代表を集めて全国規模の大会として開催するものまでである。また大学生の E.S.S. 連合が主催して地元地区や近隣の大学間、あるいは全国レベルで行うもの、学校や民間団体が主催し全国規模で行うものなどがある。校種も中学・高校・大学が多いが一般を対象にしたコンテストや子供を対象とするジュニア向けまでさまざまである。

三熊 (2003) は日本における英語スピーキング学習の中でスピーチが果たしてきた役割を明らかにしている。この中で、学習者が学校外部のスピーチコンテストに参加することの意義について、学習者がその場を「社会的インターフェイス装置」として認識し自己開示を行うという社会的意義を感じることができるためであると述べている (2003 : 127)。そしてこの元となるスピーチ学習は教室の中においてよりも学生の自主的課外活動としての英語会 (いわゆる E.S.S.) によって100年以上継続し実践されてきた事実を指摘している (2003 : 1)。

筆者は過去30年を超える間に自らコンテストとしてだけでなく、審査員としてもスピーチコンテストに数多く関わってきた²。そうした経験の中でとりわけ高校生、大学生が参加するコンテストが「教育的」に意味のある

2 筆者がこれまでに関わったコンテスト、あるいは現在も継続して関わっているものを示す。コンテストとしては Toastmasters Club Contest, Toastmasters Area Contest, All-Japan Toastmasters Speech Contest, ジャパンタイムズ英語レシテーションコンテスト、審査員あるいは審査委員長としては、近畿地区短期大学英語スピーチコンテスト、流通科学大学スピーチコンテスト、東西六大学英語弁論大会、神戸市高校英語スピーチコンテスト、三田市

活動となるために、いくつもの課題があることを認識するに至った。

ここで「教育的」と述べた。コンテストはコンクールやコンペティションなど他の競技的催しと同様に結果として優劣の順位をもたらすものであることは事実である。しかしスピーチコンテストを単に勝者を選び褒め称えるだけの機会ではなく、全ての参加者がその経験から自らの将来に向けて多くを学ぶことのできる貴重な機会とするためには、主催者、発表者、指導者³、聴衆のそれぞれがコンテストの意義を十分に理解して参加することが求められる。

この小論ではそうした認識のもとにスピーチコンテストのもつ問題点や課題を論じ、より望ましい教育的活動として開催していくための方策を提言したい。

2. スピーチの準備から発表へ向けてのプロセス

2.1. コンテスト全体の流れ

スピーチコンテストを企画する初期段階から最終的にコンテストを終了するまでの全体の流れをそれに関わる複数の立場から概観すると表1のようになる。

2.2. 主催者による企画

コンテスト主催者側は十分な時間的余裕をもってコンテスト要項を発表する。そこには日時、会場についてはもちろん、発表スピーチに統一テーマを設ける場合はそのテーマ、制限時間、参加資格等が明記される⁴。一つのコンテストの上位入賞者が自動的に次のコンテストの出場者となっていく場合は、最終段階のコンテスト要項が十分早く発表される必要があることはいうまで

3 \国際交流協会英語スピーチコンテスト、兵庫県高校生英語スピーチコンテスト、大阪府高等学校英語弁論大会、近畿地区高専英語スピーチコンテスト、同英語プレゼンテーション・コンテスト、山陽学園大学上代杯争奪スピーチコンテストなどである。近畿高等学校英語スピーチコンテスト、全国高等学校英語スピーチコンテストには聴衆として参加し、ビデオ撮影も行っている。

3 高校生が参加するスピーチコンテストではその学校の英語教員やALTが指導にあたることが多い。一方大学のESSクラブメンバーが参加するコンテストなどでは部員同士や上級生が指導するといったピア・ラーニングの態勢となることが多い。教師が一切介入せずにピア・ラーニングの手法で行ったコンテストについては藤田・フランブ(2009)参照。

4 例として2009年香港杯全日本大学生英語スピーチコンテストでは「日本と香港の観光交流推進に果たす私の役割」など4つのテーマからひとつを選ぶこと、出場資格は日本の大学に在籍し英語を母国語としない学生、発表時間はスピーチ7分、Q&A3分と明記されている。

表1 コンテスト全体の流れ

時間の流れ	主催者	審査員	発表者・指導者	聴衆
企画 出場者募集	コンテスト要項決定 外部へ向けて公表		参加の決定, 申込み 原稿の準備, 指導 原稿の仕上げ, 指導	
準備期間	参加申込み受け 予選審査 原稿受付 審査員決定, 事前協議 審査基準確認 役割分担調整 予算調整	主催者と事前協議 審査基準確認 原稿事前審査	発表の練習, 指導 発表の仕上げ, 指導	
大会当日	会場設営 手順確認 審査員との最終事前協議 審査集計 表彰準備 主催者反省会	審査手順確認 発表審査 審査員協議 順位決定	発表 助言 省察	聴衆として参加

もない。例えば2007年度から開始された全国高等学校英語スピーチコンテストでは全国9ブロックの地区大会を予選として統合する形で2008年2月に第1回全国大会が行なわれた。それぞれの地区大会は全国大会開始以前から行われておりスピーチの発表時間制限も各地区大会で異なっていた。そのため第1回全国大会の発表時間は各ブロックの制限時間の差については考慮しないとし、最も長いブロックの発表時間である7分を最長として行った。第3回目となる2009年度の大会は2010年2月の開催だが、この発表要項には発表時間は4分30秒～5分30秒と明記されており、各地区大会、そしてそれにつながる各都道府県大会、さらにその前段階となる予選での発表時間設定もその制限時間にならうことになる。このように時間設定が大切なのは共通に与えられた一定時間の枠の中でいかにメッセージを聴衆に伝えるかが問われるためである。

2.3. 発表者による原稿準備

スピーチコンテストに参加しようとする生徒は聴衆に伝えたいメッセージ

5 北海道, 東北, 関東甲信越, 東京, 東海北陸, 近畿, 中国, 四国, 九州。

をもつことが大切である。以前、コンテストに参加したいとして相談に来たもののまだ具体的な内容は考えていないという学生がいた。このような場合、教師の指導助言により漠然としたアイデアを意味のある形に形成していくという作業が行われることもある⁶。スピーチコンテスト参加は原稿を用意するという最初の段階でまず困難を感じる生徒が多いため、指導する教師の側にも発表する生徒・学生の力に応じた忍耐強く丁寧な指導が期待される。

スピーチの原稿をオリジナルの英文エッセーと考えると、口頭発表能力以前にライティングの力が問われることになる。自らスピーチ発表に耐えうるレベルの英文を書く力のある生徒であれば原稿に対する教師の助言も最小限に抑えることが可能であるが、生徒や学生の中には教師の指導や修正を何でもそのまま安易に受け入れ、理解できていない状態のまま発表に至る者がいる。原稿が自らのものとなっていないという事実は不安げな発音や不自然なジェスチャーなどとなって実際の発表の中に現れ、審査員や聴衆の目に明らかとなる。コンテストの本番のステージを最高に意味のある場とするため、指導者は生徒や学生の身の丈に合わせた語彙やスピーチにふさわしい表現⁷、本人の個性を生かした発表スタイルの指導を心がけたい。

2.4. 主催者の準備

発表者と指導者がコンテストに向けて準備を進める間、主催者側もさまざまな準備を進める。筆者の知るところでは、実行委員会メンバーは数名から多い場合は10名を超えるものまでその規模はさまざまである。大人数の委員会では実行委員長が全体を統括することはいうまでもない。本番会場は既に

6 三熊(2002:63)は「スピーチを準備する段階は、英語や話しぶり以前にまず「思想表現」に関する議論が起こるのであるから、1つの原稿をものにするためには、そしてその際教師からの押しつけの次元を超越しようとするなら、コーチとしての教師と生徒は「膝を突き合わせて」話し合う communication partner となる必要がある。」と述べている。

7 Dale & Wolf (2006:38)は Write for the Ear という項で聴き手が理解しやすい表現を用いることの大切さを論じている。The facilitation of a listener's comprehension of information can be better accomplished by the speaker's utilization of succinct words. という文は文字を見ないで音だけで聞くと難しく、実際のスピーチでは Listeners understand information more easily when a speaker uses short words. が望ましいとしている。

大会要項を発表した段階で決定されているが、当日の細かな進行スケジュールや各役割分担については詳細な議論が必要となる。事前に準備すべき項目としては次のようなものがある。

- ・ 掲示物の準備
- ・ 受付業務内容の確認，分担
- ・ 発表者への指示，当日の誘導方法
- ・ 審査員の決定
- ・ 審査方法，集計方法等について審査員(特に審査委員長)との事前協議
- ・ 主催者側代表挨拶の依頼
- ・ 来賓挨拶の依頼
- ・ プログラムの作成，印刷
- ・ 表彰状の準備
- ・ 司会者の決定と指導
- ・ 写真撮影・ビデオ記録の準備
- ・ 予算案作成と会計業務

長年の歴史のあるコンテストではマニュアルが整備され、実行委員会のメンバーが毎年変わってもマニュアルが引き継がれていく。運営についてはこうしたノウハウの蓄積が生きてくるが、毎回のように実行委員会を悩ませるのはおそらく審査員の決定であろう。世界的なスピーチとリーダーシップ訓練の組織である Toastmasters International ではコンテストの審査員になるために厳格な基準を設定している。自らが所属するクラブでスピーチを複数回発表し終えていること、所属するクラブレベルでのスピーチコンテストの審査を行った経験があること、などが地区大会、全国大会など上位のコンテスト審査員を務めるための条件となっている。⁸

英語教師や英語ネイティブスピーカーは英語の質も含めて発表者間の優劣

8 Speech Contest Frequently Asked Questions by Toastmasters International.

を論じることができる。しかし発表者が時間をかけて原稿を準備し、繰り返し練習をして完全にスピーチを覚えて自分のものとし⁹、多くの聴衆の前に立ってそれを伝えるという行為にはそのプロセスを自ら実際に体験した者でなければ分からないさまざまな苦労もある。英語の専門家というだけでなく発表者の立場を十分に理解できる審査員の配置も考慮したい。いずれにしても審査員として行うスピーチの評価に対して十分に説明責任¹¹を果たすことができるだけの人材を揃えることが理想である。

次に事前の準備の中で大切な項目の一つである司会者選定について述べる。コンテスト当日の司会者は教師が担当する場合と生徒が担当する場合とがある。大会の規模が大きく上位のものになるほど形式性も求められるため生徒には負担が大きく、実力のある教師が務めることが多い。一方、県大会や地区大会レベルであれば残念ながらその大会に勝ち進むことのできなかった前段階のコンテスト出場者が司会を務めることもある。

司会進行を任されるほどの生徒であれば、英語の音声習熟度は高いものをもっていることが多い。しかし司会者の役割というのは単に用意された原稿を良い発音で読むだけでないことはいうまでもない。会の司会者の役割にはいろいろあるが、コンテストでは次のようなものが考えられる。

1. 最初に場の雰囲気作り
2. 発表時間や審査時間に配慮した進行
3. 発表者が登壇しやすい場面設定

9 Grice & Skinner (2007 : 258-259) や Lucas (2007 : 301-304) を始めとする専門書によればスピーチ発表のスタイルは大きく Impromptu, Manuscript, Memorized, Extemporaneous と4つに分けられる。スピーチコンテストの発表は当然ながら Memorized スタイルである。覚えるという作業と本番で手元に原稿がないことによる不安や Memory loss の危険から発表者にとっては極めて負荷の多いスタイルである。

10 実際に筆者がこれまで一緒に審査を務めた審査員の中には、日本人英語教員、ネイティブスピーカーを問わず、自らスピーチを行ったことがなくまた審査に関わる明確な判断基準も持ち合わせず不安を感じさせた審査員がいたことも事実である。

11 ここでいう「説明責任」とは例えば、なぜこの発表者を選んだか、なぜその得点をつけたのか、それぞれの発表者のよい点と改善できる点は何か、といった項目について明確に言語的に説明できることを意味している。

司会者の第一声や発表が始まるまでのオープニングの部分は特に場の雰囲気作りという意味で大切である。2.は進行予定表によって進める中、現実的にはあちこちで時間の伸び縮みが生じる。また発表者と次の発表者の間に審査員が審査用紙に評価やコメントを記入する時間をとる場合には、1分程度を確保しながらも審査員の様子をうかがい次に進める必要がある。また発表者の名前やスピーチタイトルを正しくアナウンスし、気持ちよく発表できるようにする。名前やタイトルの読み間違えは発表者に精神的動揺を与えることにつながるためである。

あるコンテストで男子生徒が司会を務めたことがあった。筆者は途中の休憩の間に司会者であってもできるだけ聴衆とのアイコンタクトを心がけるよう助言した。彼はすぐにその意味を理解し、その日の後半と翌日のコンテストでは見事に堂々と司会の大役をこなしコンテスト全体の成功に大きく貢献した。他に女子高校生の司会を複数回経験しているが、どのケースでも2人でペアとなり交互に発表者名のアナウンスを担当していた。そこで見られたのは少しでも読み違えをすとお互いに顔を見合わせて照れ笑いを浮かべながら言い直すといった態度で、これは改められるべきであるのはいうまでもない。スピーチコンテストの司会者を務めるというのは発表者としてコンテストに参加するよりも得がたい経験である。その意味や役割を司会者も指導者もよく理解しておきたい。

これらの他にも主催者側・実行委員会側が事前に行うべき準備の中で、スピーチ発表中に作業をすることになる写真撮影とビデオ撮影に関しては、ビデオ撮影は特に大きな物音を立てることはないが、写真撮影はプロの業者に依頼する場合であっても静穏な発表環境を保つことができるように事前に注

12 写真撮影はシャッター音やフラッシュが発表の邪魔になるため注意が必要である。第1回、第2回の全国高等学校英語スピーチコンテストでは主催者側から依頼されて撮影しているはずのプロのカメラマンが消音装置もつけずにシャッター音を響かせ、また発表中に会場の通路をうろうと歩き回りフラッシュを使用するなど、こうした舞台撮影を担当するプロとは思えない極めて無神経な撮影を行った。発表者のみならず会場でスピーチに聞き入っている聴衆にも邪魔になるため筆者は聴衆の立場でカメラマンに注意を促したが、まずは主催者側が業者選定や打合せ段階で十分に監督すべき問題である。

意しておくことが必要である。

3. スピーチの発表からフィードバックへのプロセス

3.1. コンテスト当日の準備

コンテスト当日はまさに一回限りのイベントである。主催者、発表者、指導者、聴衆全てが共に過ごす数時間の時間と空間を意味あるものになりたい。主催者側である実行委員会メンバーは既に十分な事前準備を経て当日の役割分担を支障なく進めることができるはずであるが、危機管理対応という観点から不確定要素を洗い出し、その対応を想定しておくのが望ましい。

コンテスト本番当日の準備から開始へ向けて主催者が行うべき確認事項の中には次のようなものがある。

- ・ 来賓、審査員到着¹³の確認、審査・集計方法等の最終打ち合わせ
- ・ マイク、会場設備、必要機材の準備確認
- ・ 進行に関わる変更点等、司会者と確認
- ・ タイムキーピングに関する機材、手順、発表者への時間通知方法の確認

マイクは大きな会場では必ず用いることになる。会場によく声を通るかどうかがスピーチの印象も変わるので大会開始前の発表者自身によるマイクチェックは重要である。発表者もマイクの前で「アーアー」と声を出すだけでなく実際のスピーチの開始部分などを試し、会場でどのように聞こえているか指導者に確認するとよい。¹⁴

時間計測もコンテストの大切な要素となる。Toastmasters のコンテストには発表時間制限が5分から7分というものがある。この時間に対してプラ

13 コンテスト当日、審査員が交通事情や急病のため出席できない、あるいは日程の思い違いで現れないということが実際に起こっている。

14 本番で一人目の発表者の音声十分に会場に流れなかったため、審査員チームと主催者側が協議し、最終の発表者の後に再度発表の機会を与えたコンテストがある。

スマイナス30秒の余裕が設定される。つまり4分30秒から7分30秒の範囲で発表するということである。発表者の最初の Verbal あるいは Non-verbal なシグナルからスピーチの最後の言葉までを、複数のタイムキーパーが測る。例えばある発表者が7分32秒となった場合はわずか2秒の超過ではあるが失格となる。審査員は発表時間の長さについては考慮せずに審査を行うようになっている。審査員の集計結果で例えば3位となった発表者もタイムキーパーの計測で時間超過していた場合は失格となり、次点の発表者が繰り上がる。

一方で高校・大学のスピーチコンテストでは時間超過した者を、自動的に失格とするのではなく一定の得点を減点する方法がとられることが多い。前述の2009年度全国高等学校英語スピーチコンテスト実施要項では明確に4分30秒～5分30秒と記されているものの、満たない場合と超過の場合は失格ではなく減点となっている。

さらに本番中にどのように発表者に時間経過を知らせるかについても工夫が必要である。ベルを鳴らすことがあるが、その音や鳴らし方によっては発表への影響も生じる。一方、信号機のような青・黄・赤といったランプ¹⁶を用いたり色のついた大きなボードを掲げることで発表者の目にとまるように示す方法もあるが、これも会場によってはステージ上と会場側の照明の明るさの差からはっきり目に入らないこともある。さらにタイムキーパーが会場のどの位置に座るかも含め、最善の方法を検討することが望まれる。発表者が時間経過を確認できること、発表の邪魔にならないこと、聴衆や審査員に余計な判断を与えないことなど、時間計測と周知方法一つをとっても発表者の立場に立った細やかな配慮が望まれる。¹⁷

15 失格となることを明記した例もある。全国高等学校英語スピーチコンテスト中国ブロック予選2007年度大会要項には、制限時間は7分以内、6分45秒で予鈴を鳴らし、7分を超えると鐘を連打し失格と記されていた。

16 Speech Contest Rulebook by Toastmasters International (p.12)

17 タイムキーパーが舞台上、発表者の斜め後方に2人座ったケースがあった。これは発表者にとっては聴衆への集中を阻害され、また聴衆からは発表者以外の者がステージ上に見えるという不自然な設定である。

3.2. 発表者によるスピーチ発表

McLean (2003 : 231-233), Miculka (1999 : 186-188) を始めとしたスピーチ・コミュニケーションの専門書は、聴き手に対して訴えかけるには、話し手の持つ Logos, Pathos, Ethos の3つの要素が重要であるとしている。Logos はいかにわかりやすく整理して論理的に話を進めるかに関わる構成的要素, Pathos は聴衆の感情に共感を与えるための感情的要素, Ethos は専門的知識, 信頼性, 熱意など話し手自身に関わる人格的要素である。さらにEthos には Competence, Trustworthiness, Enthusiasm, Poise の下位項目を置く。

Logos (Logical Appeal)	lead the audience to an acceptance with well-worded arguments
Pathos (Emotional Appeal)	appeal to the audience by personalizing the benefits of the proposal
Ethos (Speaker Appeal)	show speaker's personal qualities and attractiveness
Competence (Expertise, Credibility)	
Trustworthiness	
Enthusiasm	
Poise	

スピーチ内容の構成, 論理展開は Logos の領域であり, 主張を裏付けるための具体例や経験によるエピソードは Pathos に相当する。しかし Ethos を発表者自身の要素ととらえると, 例えば著名な講演者が前に立っただけで聴衆の期待感を高めてくれるのと同じことを高校生, 大学生に期待するのは難しい。そこで Ethos の Competence は内容のもつ信頼性, 信憑性, Trustworthiness は話し手の誠実さ, Enthusiasm は聴衆に訴えたいという話し手の熱意, Poiseは会場の聴衆の反応を感じながら柔軟に発表をコントロールする力ととらえると分かりやすい。

次ページ図1の「1スピーチ発表」の段階は発表の際に聴衆の反応を観察

18 Timm (2000 : 64) は “A good presenter will note the degree of attentiveness; facial ↗

しながら発表者自身が内省しリアルタイムで自己分析を行う様子を示している。しかし大きな会場では客席側が暗く、また聴衆と距離があってほとんど聴衆の表情や反応を把握することができないことがある。同じような状況でも経験豊かな演奏家や俳優であれば聴衆の中に漂う「気」を感じ取り演奏や演技に反映させることもできるかもしれないが、高校生、大学生によるスピーチ発表では第三者的視点からの自己観察能力 (Reflective self) によるリアルタイムに行われる自分へのフィードバックは難しい。それでもステージで体感したスピーチ発表という言語活動の経験¹⁹が自らの中に残ること自体がコンテスト参加によって得られる教育的意義の一つとなる。

続く2の段階はスピーチ発表が終わり指導者からすぐにコメントを受ける状況、あるいは全てのスピーチ発表が終了し、審査発表を待つ間に家族や友人を始めとする聴衆から感想を寄せられる状況を経て、審査結果が発表される段階を表したものである。

3.3. 発表者と審査員の懇談会の開催

現在行われているコンテストでは前述の第2の段階で終了しているものが多い。これは関係者の地理的、時間的制約上、現実的には止むを得ないことなのかもしれない。ただコンテストに向けて発表者と指導者がかけた時間と努力に報いるにはあまりにもあっけない幕切れといわざるをえない。筆者はあるコンテストで発表した女子生徒が、コンテスト終了後に指導を担当した先生と肩を落として力なく駅の方へ並んで歩いていく後姿を目にし、深く考えさせられたことがあった。彼女のスピーチは優れた点も多く上位入賞を狙

\expressions; and levels of restlessness, excitement, passiveness, or apathy. All of these convey to the speaker whether or not he or she is communicating effectively.”と述べ、聴き手の様子を観察することによって得られる情報の重要性を指摘している。また MacLinnis (2006 : 78) は “You’ve got to let your audience know that you care about them. One of the best ways to do this is to make eye contact with people throughout your presentation.” と述べている。

19 このわずか5分あまりの発表であるが、Dunkel (1990 : ix) が “Indeed, performance is a microcosm of life condensed into a few minutes.” と述べているように発表者にとっては自分の全てが凝縮された時間という意味あいもある。

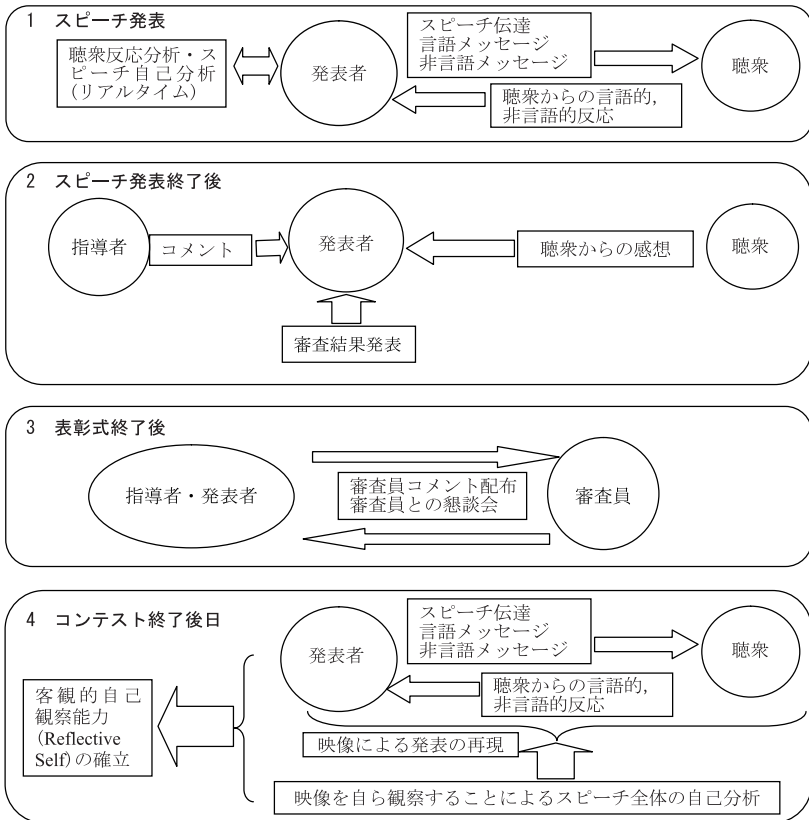


図1 発表者へのフィードバックの方法

えるものであった。ただ最終的に入賞した発表と比べると、さらに聴衆へのアピールを工夫するなどいくつか改善できる点があったことも事実である。時間と労を押しまらず指導にあたった先生とその指導を信じて懸命に努力した生徒との信頼関係はどうなるのであろうか。単に結果だけでなく、その学びの意味に対する十分な省察を行いたい。

そこで図の第3段階として示したのが発表者と指導者に対し、第三者的視点、望ましくは審査員からのコメントをフィードバックする機会である。ここで発表者と指導にあたった先生が、日本人審査員やネイティブスピーカー

の審査員から発表の良かった点と共にさらに改善できる点を直接聞くことは非常に意味のある学習機会となる。²⁰

完璧な発表というものがない限りは、どの発表にも優れた点と改善できる点がある。実際にこれまでに筆者が関わったコンテストでは、最終的に第1位となった生徒に対して審査員の全てが揃って第1位をつけたことはなかった。審査員による順位評価が分散するということは、結果的に第2位になった生徒や第3位になった生徒を第1位と評価した審査員もいる可能性があり、高く評価された点について直接それらの審査員から話を聞くことができるのは本人にとって大きな励みになる。これを発表者本人が受け入れやすい形で伝えるのはコンテストに関わる審査員の使命であると考え。

ただコンテスト終了後にこうした場を設けることが、会場や予算上の問題、発表者自身や審査員の時間的制約などで実現できないケースも考えられる。さらに発表者に直接、口頭でコメントを与えることに対して消極的な審査員がいるかもしれない。そうした場合のために少なくとも発表者個別に各審査員から手書きのコメントを渡す仕組みを作るとよい。

いくつかのコンテストでは審査用紙の一部に自由記述スペースを設けて、審査員が短いコメントを書き込めるようにしている。審査表を回収し集計する際に、コメント部分を切り離して発表者ごとにまとめ、全体の審査発表終了後にそれぞれの発表者に渡す。これにより入賞できなかった生徒もコメントから学ぶことができるし、続く上位のコンテストに進む生徒もさらに改善できる部分を把握することができる。また前述の懇親会を開催する場合もそのコメント用紙を参考にしながらの助言が可能となる。

こうしたコメントを書き込む時間は発表者と発表者の間の1分程度の時間

20 全国高等学校英語スピーチコンテストでは、閉会式終了後に1時間の枠でレセプションを設定している。これは午前中に発表を全て終わり、昼の時間を利用して集計を行い、午後は結果発表、表彰式を行って閉会するという余裕のある時間設定によるところが多い。また兵庫県高校生スピーチコンテスト、広島女学院大学ゲーンズ杯高校生英語スピーチコンテスト、千葉商科大学環境スピーチコンテストなどで閉会式の後、審査員と出場者の懇談会を最初から設定しているのは望ましい。

を用いる。5分から6分の発表を聞き評価する間に審査員にはそれぞれの発表の優れた点と改善点は既に明確に把握できているため、コメントの記入に困難はないはずである。

3.4. 審査と集計方法

McLean (2003 : 227) は What Makes for a “Good” Delivery? というセクション見出しを立てている。「良い発表」という場合の「良い」とはどういうことなのかという問題提起である。明快にタイムで成績を競うスポーツ競技がある一方、体操、シンクロナイズドスイミング、アイススケートのように審査員や審判団が技術点、芸術点をつける競技もある。また絵画、書道、音楽のように見る人、聴く人の感性に訴える芸術分野においてその出来栄を競うものもある。スピーチ発表においては発表時間の計測はできても、他の要素はこうした審査員による競技やコンクール等と同様に専門的知識・能力を備えた審査員による主観的判断に多くを委ねる。しかし主観的判断といえども現実的にコンテストが行われていることからすれば、そこには一定の判断基準が確立されているはずである。

スピーチ発表という言語活動を「何を」「どう」伝えるかととらえると、スピーチを構成する要素は Story Message である「内容 (Content)」と Physical Message である「発表 (Delivery)」とに大きく分かれる。そしてその Story Message を聴衆に伝える言語の語彙選択、文法表現、音声表現を「言語 (Language)」として加えることができる。さらにそれぞれの項目には下位項目が設定できる。²¹

Content:

Speech Development: structure, organization, support material

Effectiveness: achievement of purpose, interest, reception

Speech Value: ideas, logic, original thought

²¹ Contest Judging Criteria by Toastmasters International. による。Toastmasters では Content に50%、Delivery に30%、Language に20%を配し、さらにそれぞれの下位項目には Excellent, Very Good, Good, Fair という判断基準とその目安になる得点を示している。

Delivery:

Physical: appearance, body language

Voice: flexibility, volume

Manner: directness, assurance, enthusiasm

Language:

Appropriateness: to speech purpose and audience

Correctness: grammar, pronunciation, word selection

美しい日本語を話す外国人がいるように、英語スピーチコンテストでは時には英語のネイティブスピーカー審査員が驚くほど規範的で美しいアメリカ標準英語やイギリス英語RPを披露する生徒がいる。こうした場合の評価をどうするかについても主催者側と審査員が事前に協議しておくべきであろう。かつてはそうした発表者の英語音声レベルのパフォーマンスが内容に優先して評価されたこともあったが、近年の傾向としては音声の質が内容理解に支障がない限りは内容を重視するという方向に傾いている。しかし一方で努力して達成した極めて優れた音声発表能力自体も評価されるべきであり、その両者のバランスは難しい。²²

具体的な審査表はコンテストの主催者側実行委員会が一般に公開していないことが多いためここでは検討を控えるが、審査のプロセスとしては上記のような項目ごとに基準となる配点が設定されており、審査員はスピーチを聞きながらそれぞれの項目ごとに点数を与えていくことになる。各スピーチが終わった段階で小項目の点数合計をすれば例えば80点であるとか、76点であるというように各発表者の得点が分かる。このように小項目ごとに採点する分析的 (analytic) な採点方法と最初から合計点をイメージして全体得点をつける全体的 (holistic) な採点方法の2つの異なる方法があるが、説明責任を果たす必要から主流は分析的採点法である。

22 岡田 (2009 : 71) はヨーロッパの音楽愛好家が、極めてプリリアントではあるもののこれみよがしな演奏に対して「あれは音楽じゃない (Das ist keine Musik.)」という言い方をするというエピソードを紹介している。英語の場合も同様に「優れた発音」だけが独り歩きしてはいけない。また話すスピードについて福山 (1989 : 151-152) は「根深いスピード信仰」があることを指摘している。野村 (2002 : 21) では適切なスピード、明確な調音などに加え「自身の英語スタイル (My English)」を確立することの大切さを述べている。

この分析的評価による合計点と全体的評価による得点が一致するのが理想である。分析的観点から採点をしていなければ、発表者が多くなるほど全体的な得点だけを手がかりにして例えば審査員による協議の場などで後から説明をすることが難しくなる。一方で全体的評価得点つまり合計点に相当する数字を意識しておかなければ発表者間の順位が把握できなくなる。

3.5. 審査集計方法について

正しい審査結果を導くために複数の審査員の審査結果を集計する方法についても検討すべきことがある。スピーチコンテスト集計方法については大きく分けて、各審査員の与えた「得点」を集計する方法、各審査員の与えた「順位」を集計する方法、その順位に対して重み付けを行いその数字を集計する方法の3種類がある。²³ それぞれのメリットとデメリットをまとめると次のようになる。

表2 審査集計方法の比較

	メ リ ッ ト	デ メ リ ッ ト
得点集計法	審査員全体の合計点の数字に細かく得点差が出やすいため順位が分かりやすい。	ある発表者に対して極端に高い得点や低い得点をつける審査員ができた場合、他の複数の審査員の評価を上回る影響をもつことがある。
順位集計法	計算が簡単であることから結果の集計に時間がかからない。	合計点の数字の少ないものが上位となるが、集計の結果、合計点が同一となることが起こりやすい。
サブランク法	得点集計法のデメリットである極端な得点差の影響を最小に抑えることができる。	審査員個々に集計を行った後、上位の発表者から重み付け得点を加え、それを全審査員に対して行う作業に時間を多く要する。
Toastmasters 方式	サブランク法の一つであるが、審査員は上位3名の名前だけを報告するため、集計係が細かな得点の集計作業を必要とせず、迅速に結果が出る。	主催者あるいは実行委員会側が各審査員の与えた実際の得点や分析的評価を把握したり資料として残していくことができない。

²³ 本番で例えば3番目の発表者が終わった段階で審査員が集まり審査基準の再確認を行うことがあるが、審査員間での評価の違いは当然起こりうることであり、事前にしっかりと基準が確認されている限り、コンテストの流れを損なうことから必要がないと考えている。

²⁴ 音楽コンクールの審査集計方法には「新增沢式採点法」という方法も用いられている。↗

それぞれの方法についてここでは便宜上、5人の発表者と5人の審査員による架空の審査結果を想定し、それぞれの集計法について論じる。表3はその検討用の評価表である。

表3 各審査員の得点 データ1

	審査員 A	審査員 B	審査員 C	審査員 D	審査員 E
発表者 1	70 (5)	80 (3)	72 (5)	68 (5)	74 (5)
発表者 2	78 (3)	76 (5)	80 (3)	74 (4)	75 (4)
発表者 3	82 (2)	88 (1)	78 (4)	76 (3)	79 (3)
発表者 4	74 (4)	78 (4)	84 (2)	82 (2)	81 (1)
発表者 5	85 (1)	85 (2)	90 (1)	84 (1)	80 (2)

審査員の得点幅はCが18点と最も大きく、審査員Eは7点と最も範囲が狭い。得点の横に記した()内の1～5の数字はそれぞれの審査員の得点に基づく発表者の順位を表す。

これをまず単純に「得点」の合計で計算すると次の表4のような結果となる。当然、合計得点の多い発表者が上位となるため、順位は明確に現れている。

表4 得点集計法による各発表者の合計点と順位

	審査員 A	審査員 B	審査員 C	審査員 D	審査員 E	合計	順位
発表者 1	70	80	72	68	74	364	5
発表者 2	78	76	80	74	75	383	4
発表者 3	82	88	78	76	79	403	2
発表者 4	74	78	84	82	81	399	3
発表者 5	85	85	90	84	80	424	1

次に各審査員のつけた「順位」の数字を合計したものが表5である。1位は1点、5位は5点であるから合計の数字の少ないものが上位となる。この方法で集計すると発表者3と発表者4がそれぞれ13点ずつで同点の2位となる。

表5 順位集計法による各発表者の合計点と順位

	審査員 A	審査員 B	審査員 C	審査員 D	審査員 E	合計	順位
発表者 1	(5)	(3)	(5)	(5)	(5)	23	5
発表者 2	(3)	(5)	(3)	(4)	(4)	19	4
発表者 3	(2)	(1)	(4)	(3)	(3)	13	2
発表者 4	(4)	(4)	(2)	(2)	(1)	13	2
発表者 5	(1)	(2)	(1)	(1)	(2)	7	1

各審査員が参加者に対して「点数」ではなく「順位付け」のみを行い、総合順位は各審査員の順位の上下関係による多数決を繰り返し、各位ごとに順に決定していく方法である。詳細な手順は田辺 (2010) 参照。

次にサブランク法のバリエーションと考えられる Toastmasters の方式では審査員がそれぞれの発表者に対する評価表や合計得点を全て集計係に渡すのではなく、全発表者の中から第1位から第3位までの発表者名のみを用紙に記す。つまり集計係は各審査員が各発表者に与えた具体的な得点は知り得ない。各審査員が選んだ第1位の発表者には3ポイント、第2位には2ポイント、第3位には1ポイントを与えながら全審査員の結果を集計するという方法である。その方法で再度集計を行うと次の表6の結果となる。

表6 Toastmasters 方式による順位

	審査員A	審査員B	審査員C	審査員D	審査員E	合計	順位
発表者1		(3) 1				1	5
発表者2	(3) 1		(3) 1			2	4
発表者3	(2) 2	(1) 3		(3) 1	(3) 1	7	2
発表者4			(2) 2	(2) 2	(1) 3	7	2
発表者5	(1) 3	(2) 2	(1) 3	(1) 3	(2) 2	13	1

発表者3と発表者4が同点の第2位となり表5と同じ順位結果が現れている。Toastmasters でユニークなのはこうした場合に備えて審査委員長が覆面審査員として十分資格のある Tie-breaking Judge を依頼していることである。同位者が出る結果となった場合にすぐにその Tie-breaking Judge の審査結果を加えることで全体の順位が決まる。この Toastmasters の集計方法は極めてシンプルで迅速に結果を出すことが可能となっている。

さて表3で審査員Cが発表者5人に対してつけた順位は同じと仮定した場合でも、実際の得点を発表者3と4に対して次の表7のようにつけたとすると、順位による集計では影響がないものの得点合計による集計法では表4と表8のように順位に逆転現象が生じる。

25 このため審査員の中には分析的評価用の審査用紙が与えられた場合でも細部にわたる評価を行わず、自分のメモを参照しながら全体的評価で100点中の得点を決めるものもある。これは特に審査用紙そのものの提出を求められない場合に見られる。

表7 各審査員の得点 データ2

	審査員 A	審査員 B	審査員 C	審査員 D	審査員 E
発表者 1	70 (5)	80 (3)	72 (5)	68 (5)	74 (5)
発表者 2	78 (3)	76 (5)	80 (3)	74 (4)	75 (4)
発表者 3	82 (2)	88 (1)	74 (4)	76 (3)	79 (3)
発表者 4	74 (4)	78 (4)	89 (2)	82 (2)	81 (1)
発表者 5	85 (1)	85 (2)	90 (1)	84 (1)	80 (2)

表8 得点集計法による各発表者の合格点と順位

	審査員 A	審査員 B	審査員 C	審査員 D	審査員 E	合計	順位
発表者 1	70	80	72	68	74	364	5
発表者 2	78	76	80	74	75	383	4
発表者 3	82	88	74	76	79	399	3
発表者 4	74	78	89	82	81	404	2
発表者 5	85	85	90	84	80	424	1

発表者5の第1位、発表者1の第5位、発表者2の第4位はどのような集計方法をとっても不動であるが、得点集計法を用いた場合は発表者3と4については順位が入れ替わる。上位入賞者の順位決定や、第3位あるいはコンテストによっては第5位、第6位という表彰される入賞順位に入るか入らないかといったボーダーラインに位置する発表者に対する順位決定は、集計結果に加え十分な討議もふまえてとりわけ慎重に行うようにしたい。

コンテストごとに伝統的に行われている審査協議方法や集計方法²⁶があるはずだが、同位者が出た場合や極めて微妙な判定が要求される際には、異なる集計方法を判断の参考とするのが望ましい。なお音楽コンクールなどで個々の審査員の得点や集計結果を公表することもあるが、学校現場と密接に関係しているスピーチコンテストでは特に下位の発表者の立場を考えれば、審査結果を全て公表することは決して教育的とはいえない。その意味でも前述の審査員による手書きコメントや懇談会での助言が果たす役割は大きい。

26 中村(1988:234-242)にはチャイコフスキー・コンクールのピアノ部門入賞者および順位決定の興味深い舞台裏がつつられている。最終審査会でまずは第1位を出すかを決め、次に1人にするか2人にするかを決め、そして誰にするかを定める。同様に第2位以下も該当者を何人出すかを決め、続いて具体的な候補者を推薦していくとのことである。審査員がそれまでにつけた得点は予選通過者を決定するための資料となるが、最終審査会では具体的に得点合計で競うわけではない。

3.6. 審査表の回収方法

審査員と発表者の数が増えると、全ての発表が終了してから審査表を回収し得点集計作業に入り、合計得点を計算するのにかなりの時間を要する。そのため発表者一人ひとりが終わるたびに審査表を回収し順次コンピュータに得点を入力していくという方法をとることがある。筆者もこの回収方法を複数のコンテストで体験した。集計作業の効率化や表彰式へ移るまでの時間短縮にはなるが、審査員からすれば全発表者を聞き終えた後、再度、自らの順位評価を確認し納得した上で集計係に手渡したいという思いもある。審査表の回収と集計方法を審査員、主催者、発表者の立場から比較したものが表9である。

表9 回収方法の比較

	発表ごとに回収	全発表終了後に回収
審査員の立場	<ul style="list-style-type: none"> 各項目に得点を記入するだけで集計等の細かな作業を主催者側に任せられることができる。 審査表を出してしまうと発表者間の比較が難しくなる。 後から修正することができず、厳格な審査基準が要求される。 	<ul style="list-style-type: none"> 全発表者を通して見直すことで評価や得点、順位を再度確認することができる。 実際には発表の間や発表後すぐに自ら集計をしたり順位確認することは時間的に困難な場合もある。
主催者の立場	<ul style="list-style-type: none"> 集計作業に時間的な余裕ができ十分な点検時間もできる。 	<ul style="list-style-type: none"> 短い時間で集計作業を終える必要がある。
発表者の立場	最終的に順位が発表される限りは、どちらの方法で回収されても発表者の立場からは変わらない。	

体操競技の採点、アイススケートやシンクロナイズドスイミングの採点のように一団体の競技が終わるごとに得点が表示されるものもあることからすれば、スピーチコンテストでも一人ずつ発表が終わるたびにそれぞれの審査表を提出すること自体は審査員として能力的にできないわけではない。²⁷

もちろん前項で論じた複数の集計方法の中の極めて簡便に集約できる方法を採用するのであれば、全発表者が終わってからの集計、結果発表でもそれほど時間がかかることはないだろう。審査表の回収方法については主催者の

²⁷ 青柳 (2007) はカザフスタンの音楽コンクールの審査の報告の中で、審査員は一人ひとりの採点が終わればすぐに点数を提出し後で修正してはならなかったこと、これは音楽コンクールでは珍しいことであったことを報告している。

実行委員側と審査員側で十分な事前の協議が必要であり、コンテスト進行中に混乱の生じないようにしたい。

3.7. 発表者が自らの発表を見ることによる学び

コンテスト当日に審査員からのコメント用紙配布と共に懇談の場を設けることによって、生徒自身に発表の体験がまだ生々しく残る間に教育的なフィードバックを行うことの大切さは既に述べた。コメントの中には完全に納得できるものから本人や指導した先生にとって意外と思われるような指摘まで含まれている可能性がある。こうした点も含め発表者の生徒がコンテスト参加を追体験するために後日、ゆっくりと自分の姿を自ら客観的に観察する機会²⁸を設けたい。これが図1の最後の第4段階「コンテスト終了後日」に記載した映像による自己観察²⁹である。

野村(2008)は、大学院で学ぶ現職教員や教員をめざす学生が自らのスピーチや模擬授業の映像を第三者的視点で客観的に見ることで得られる学びについて論じた。自らの姿が主観的感覚でとらえていたイメージと異なることを自覚すること、他者からの良い評価もネガティブな評価も外からの目で再確認できること、気づかなかった自分の癖や動作を知ることなど、多くの新たな気づきがあることがわかった。教師が自分の授業映像を見る際の注意についてHarmer (2003 : 293) は“The point of watching ourselves teach is not to engage in an orgy of self-criticism, but to evaluate our actions in terms of their effectiveness. Which bits of the lesson clearly work? How could we change the way we do this exercise so that next time it is more engaging, less confusing, more efficient?”と述べている。

28 野村 (2004 : 39) は *Be Prepared to Speak* というビデオの中の “Nobody is a harsher critic than you are.” という表現を紹介している。自分の改善点は自身が最も自覚していることがある。

29 Oberg (1994 : 34) は自分のスピーチを録画して見ることについて “Videotaping speeches can have tremendous benefits as it allows you to analyze yourself as a speaker and see your strengths and areas of needed improvement.” と述べている。

つまり自分の姿を見ることの目的は自己批判のためではなく、自分の動作の意味を確認し、次なる改善につないでいく手がかりを探るためである。これはまさにRichards & Farrell (2005 : 36)が教師教育の中で教師の認識について、“Although teachers usually feel that they have a good understanding of how they approach their teaching and the kind of teacher they are, when given a chance to review a video recording or a transcript of a lesson, they are often surprised, and sometimes even shocked, at the gap between their subjective perceptions and “objective” reality.” と述べていることに他ならない。このように他者からの指摘によってではなく、自ら観察し発見することを通して学ぶことは、メタ認知学習方略の一種ということもできる。Brown (2000 : 124) は metacognitive という語を“a term used in information-processing theory to indicate an “executive” function, strategies that involve planning for learning, thinking about the learning process as it is taking place, monitoring of one’s production or comprehension, and evaluating learning after an activity is completed” と説明しているように、学習過程について考え、観察し、評価するという認知プロセスである。外国語学習を成功に導いた人の学習の過程を詳細に分析した竹内(2003)においても、学習を実りあるものにするためにはこうしたメタ認知プロセスに関わる学習方略がいかに大切かが随所に指摘されている。そういった観点からすれば、時間をかけてスピーチを練り上げてきた学習過程について考え、結果や評価を考察し、自らを観察するというのはまさにこのメタ認知的学習であり、こうした自己観察を助ける手段としてビデオが有効である。野村(2008)で取り上げたスピーチ・コミュニケーション授業の履修者は自分のスピーチをじっくりと観察して与えられた質問項目³⁰に沿って記述し、英語でレポートを提出する。こうしたプロ

³⁰ 開始時に聴衆に与えた印象、目線、ジェスチャー、表情、音量、声の高さ、スピード、言いよどみなどの観点で自分を観察する。

セスで得た気づきを自ら改善の手がかりとしていくこの一連の学習の流れは、自律した英語学習者としての成長につながっている。

以上のような観点から主催者は大会の様子を撮影し単に記録として保存するだけでなく、ビデオあるいはDVDとして編集し、発表者に無償で提供³¹したいものである。

4. 結語

この小論では英語スピーチコンテストに関わるプロセスを大きく準備、本番、本番後のフィードバックという3つの段階に分け、それぞれの段階における課題の指摘と共にコンテストを「教育的活動」とするため、発表者を中心とした視点から改善策の提起を行った。その中で審査方法や審査集計についてや審査員の資格、司会者の役割、会場設備、発表時間の取り扱いなどについて述べたが、とりわけ筆者が重要と考えている観点は、

1. 発表者と指導者、審査員がコンテスト終了後に懇談できる場をもつ。
2. 発表者本人が省察するために映像等によるフィードバックを行う。

の2点である。主催者や実行委員会の努力によって既にこれらを実現しているコンテストもあるが、他のコンテストでも本論文で指摘した観点に対して何らかの改善が加えられるならば、コンテストはさらに有意義な学びの機会になることが期待される。本論文ではコンテスト全体の流れを網羅し、コンテスト枠組みの中での提案を中心に論じた。審査における全体的評価と分析的評価の問題や、分析的評価における項目設定とそれらの妥当性などについては稿を改めて論じたい。

³¹ 撮影した映像をコンピュータ等で編集しディスクに焼くといった技術は、プロの業者に依頼するまでもなく十分に一般の者の手の届くレベルとなっている。DVDも普及しディスクの価格も安くなっており、予算的にも大きな負担にはならない。

参考文献

- Brown, H. D. (2000). *Principles of language learning and teaching* (4th ed.). New York: Addison Wesley Longman.
- Dale, P. & Wolf, J. C. (2006). *Speech communication made simple*. 3rd edition. New York: Pearson Longman.
- Dunkel, S. E. (1990). *The audition process: anxiety management and coping strategies*. New York: Pendragon Press.
- 藤田朋世・フランブ順美.(2009). 「ピア・ラーニングの概念を取り入れたスピーチコンテストの試み 重慶大学での実践報告」 『世界の日本語教育』 19. 199-213.
- 福山忠夫. (1989). 『英語スピーチの指導と実例』 京都：山口書店.
- Harmer, J. (2001). *The practice of English language teaching* (3rd ed.). Essex: Pearson Education.
- Grice, G. L. & Skinner, J. F. (2007). *Mastering public speaking* (6th ed.). Boston: Allyn and Bacon.
- Lucas, S. E. (2007). *The art of public speaking* (9th ed.). Boston: McGraw Hill.
- MacInnis. J. L. (2006). *The elements of great public speaking*. Berkeley: Ten Speed Press.
- McLean, S. (2003). *The basics of speech communication*. Boston: Allyn and Bacon.
- Miculka, J. (1999). *Speaking for success*. Mason: South-Western Educational Publishing.
- 三熊祥文 (2002). 「パブリック・スピーキングの実践と知的昇華」 JACETオーラル・コミュニケーション研究会編 『オーラル・コミュニケーションの理論と実践』 東京：三修社.
- 三熊祥文. (2003). 『英語スピーキング学習論 E.S.S.スピーチ実践の歴史的考察』 東京：三修社.
- 中村紘子. (1988). 『チャイコフスキー・コンクール』 東京：中央公論社.
- 野村和宏. (2002). 「パブリック・スピーキングを構成する要素と授業実践」 JACETオーラル・コミュニケーション研究会編 『オーラル・コミュニケーションの理論と実践』 東京：三修社.
- 野村和宏. (2004). 「Be Prepared to Speak A Step-by-Step Video Guide to Public Speaking」におけるパブリック・スピーキング論 『神戸外大論叢』 第55巻. 第3号. 神戸市外国語大学.
- 野村和宏. (2008). 「映像を通じた自己観察による教師の気づきと成長」 『教師の成長に寄与する外国語授業研究法の開発と重層的研究データベースの構築』 平成17-19年度科学研究費補助金研究成果報告書(17520390) 神戸市外国語大学.

- Oberg, B. C. (1994). *Speechcraft: an introduction to public speaking*. Colorado: Meriwether Pub.
- 岡田暁生. (2009). 『音楽の聴き方 聴く型と趣味を語る言葉』東京：中央公論社.
- Richards, J. C. & Farrell, T. S. C. (2005). *Professional development for language teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 竹内 理. (2003). 『より良い外国語学習法を求めて』東京：松伯社.
- 田辺正行. (2010). 「新增沢方式を解明する」『ハーモニー』第151号. 100-103. 東京：全日本合唱連盟.
- Tim, R. P. (2000). *The basics: speech communication*. Cincinnati: South-Western Educational Publishing.

インターネットサイト

- 青柳いずみこ(2007)「カザフスタンのコンクール(II)」
< <http://ondine-i.net/merde/070209.html> > (2009年8月26日アクセス).
- Toastmasters International Speech Contest Rulebook.
< <http://www.toastmasters.org/NonNavigableDocs/2009-Speech-Contest-Rulebook.aspx> > (2009年9月1日アクセス).
- Toastmasters International Web Site.
<http://www.toastmasters.org/Members.aspx> (2009年8月26日アクセス).